日本のねじ産業の動向

大　磯　義　和
OISO　Yoshikazu

1　ねじ産業の発展

日本のねじ産業は、自動車、機械、電気・電子、建築・土木などの需要家とともに発展してきた。ねじの量産化、品質の安定・向上、適正価格での安定供給を通じた信頼という日本ブランドを背景に、厳格な要求を突き付ける日本の需要家に応えてきた結果である。

今日のねじ産業の発展を牽引してきたのがISO 規格という国際規格の存在である。ISOは国際標準化機構（International Organization for Standardization）の通称で、1947年に国際機関として創設された。このISOが真っ先に取り組んだのが“ねじの標準化”であった。

ISO は、国際貿易を円滑にするための組織であり、ISO メートルねじへの一本化に努力した各国の政治的決断が大きい。1965年に日本がメートル、ユニファイ、ウイットからメートルねじに一本化できたのもISOのお陰である。国際的な孤立を招くことなく、日本のねじ産業の発展に大きく貢献しているといえる。

2　ねじ産業の推移

日本のねじ産業の統計を見てみよう。日本ねじ工業協会の推計による生産を**図1**に、財務省貿易統計による輸出を**図2**に、輸入を**図3**にそれぞれ示す。

図1　生産統計

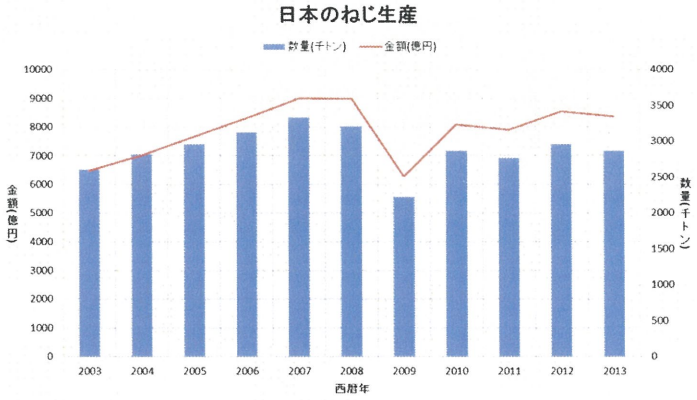


図2　輸出統計

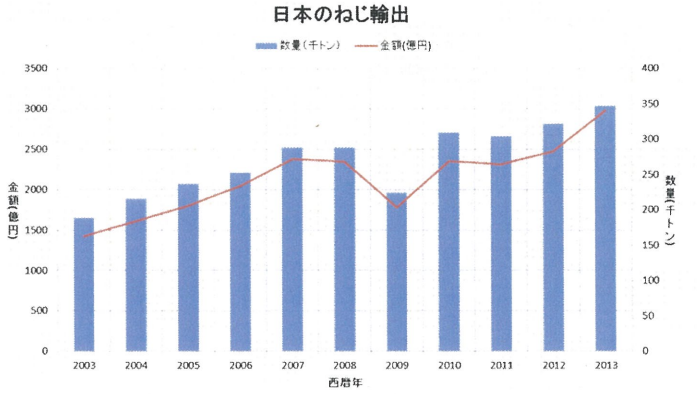
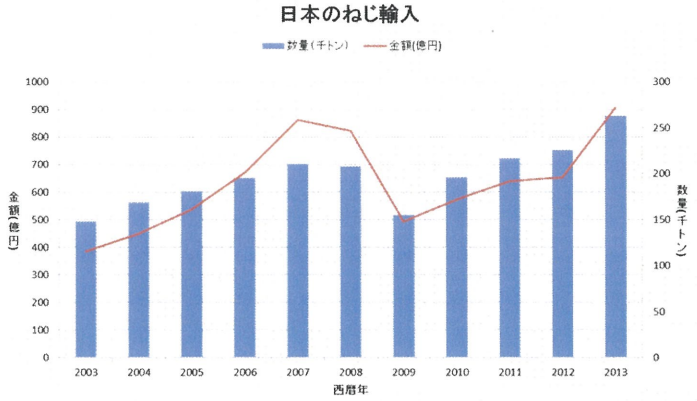


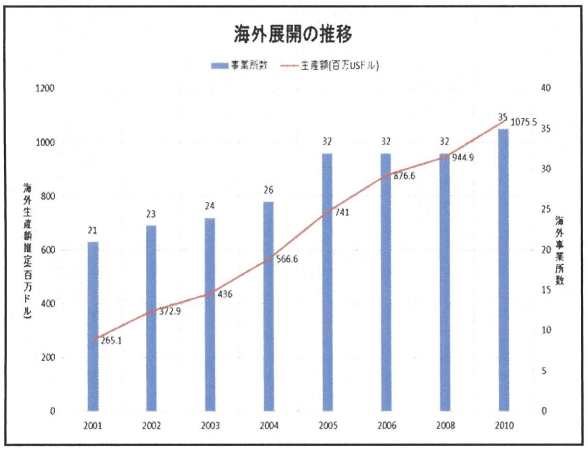
図3　輸入統計



2013 年では日本の生産は 287 万トン、8371 億円で伸びが鈍化しはじめており、輸出は 34 万トン、2982 億円と前年比 10%増で、輸入は 26 万トン、907 億円と前年比 30%増となっている。この統計から内需が減少し、輸出頼みとなっており、輸入品のシェア拡大が進んでいることが見てとれる。

一方、海外での生産活動はどうなっているか、筆者が知る範囲で推計したところ**図 4** のように増加していることが分かる。2010 年までの情報を基にした 35 事業所の合計生産額は 1000 億円を超えているとみられ、最近のインドネシア、メキシコ、インドなどへの進出を加味すると更に拡大していると考えてよい。

図 4　海外生産 (推計)



以上、直近 10 年の推移を見てきたが、日本経済のバブル崩壊後の姿をこれから見てみる。1990 年の全盛期とリーマンショック後に経済の立ち直りを見せた 2011 年とを対比してみた**図 5** が出荷額、**図 6** が事業所数、**図 7** が従業員数、**図 8** が輸出額、**図 9** が輸入額（いずれも工業統計からの数値）である。対比した 20 年間でねじの出荷額が 25%減少、事業所数が 50%減少、従業員数が 30%減少と軒並み減少である中、輸出額が 220%と 2 倍以上の増加、輸入額が 420%と 4 倍以上の伸びを見せている。この傾向がいつまで続くのかなかなか見通せないが、国内で生産して輸出で儲ける産業構造から現地で生産して現地で販売する、生産の現地化と日本への輸出（逆輸入）の傾向は、国内生産の高度化と人材の育成を強化すべき経営環境に入っていると見るべきであろう。

図 5　出荷額

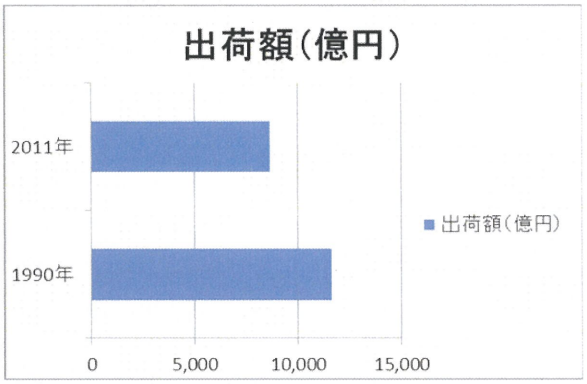


図 6　事業所数

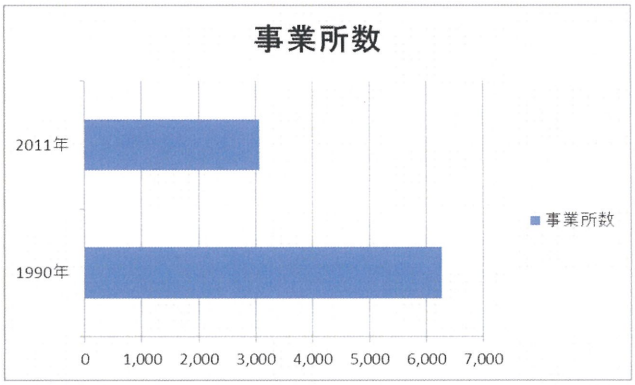


図 7　従業員数

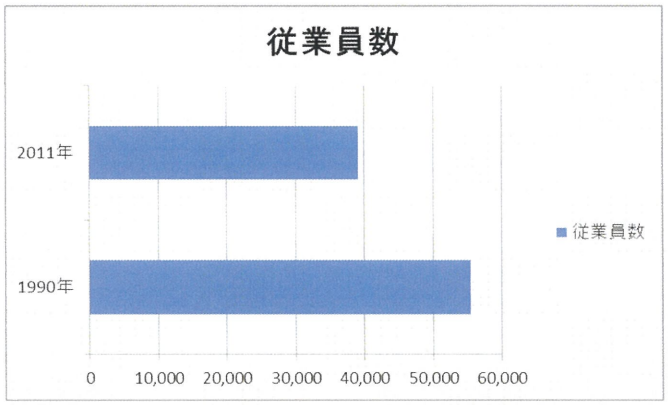


図 8　輸出額

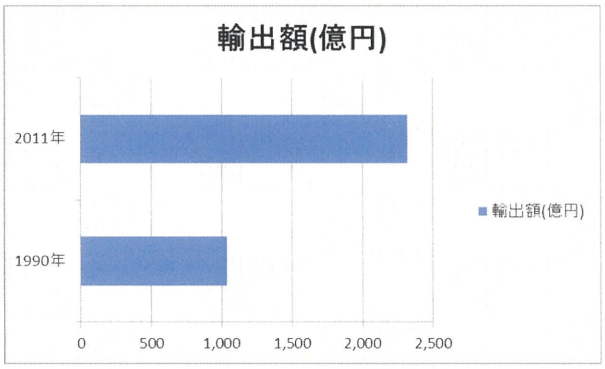
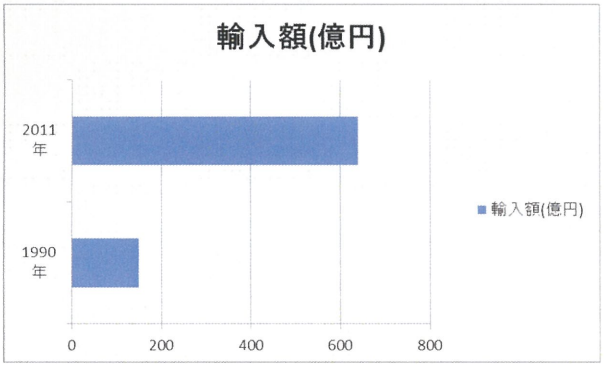


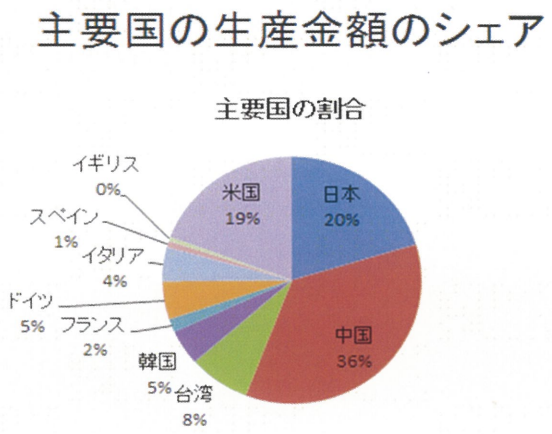
図 9　輸入額



3　ねじ産業の課題

日本の産業構造が大きく変化していることを見てきたが、世界も大きく変わってきていることを併せて見てみる。少なくとも日本のバブル期までは日米欧がそれぞれ30%ずつのシェアを確保していたと筆者は見ていたのだが、今日の世界の情勢は違うことが分かってきた。**図 10** に示した主要国の生産金額のシェア（2011 年の推定）から分かってきたことは、中国の台頭である。いつのまにか世界一のシェアを誇るねじ生産国となった中国の動向が気に掛かるところである。加えて、韓国、台湾などの技術力が向上し、品質の安定が格段に上がってくれば日本との価格競争に拍車がかかることも危惧される。

図 10　主要国のシェア（筆者推定）



輸出から海外生産へと切り替えてきたのは、主に需要家である自動車産業の力によるところが大きいが、現地生産・現地消費の傾向が強まれば現地調達との価格競争に巻き込まれ、これまでのように安定した供給が保証されない不安がつのる。　日本政府が示す成長産業に位置付けられている航空宇宙、健康・医療、環境・エネルギーの各産業分野への参入には、制度・規制などの障壁を克服して研究開発と製品開発に注力することが求められるが、これらの成長分野市場への進出には大きな参入障壁が存在することも事実である。(了)